

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 2 日現在

機関番号：34603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370845

研究課題名(和文) 元朝石刻拓影の目録化を通じての中国近世石刻史料学構築の試み

研究課題名(英文) Making catalogue of Yuan stone-inscription rubbings

研究代表者

森田 憲司 (MORITA, Kenji)

奈良大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：20131609

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：日本国内で見ることのできる元朝石刻の拓影の目録である「可見元朝拓影目録」を作成し、所属先のレポジトリーで公開した。これは、元朝史研究の近年の流れである、研究者自身が原石もしくは拓本から史料を採集するための環境づくりを目指すものであり、研究者の環境にかかわらない研究の進展をみちびくものである。この作業に際して、各項目の記述を安定化させるために、中国近世の石刻における目録記述のありかたについての検討を各項目(名称、日付、石刻としての特徴)についておこない。検討結果は、上記目録の「凡例」として公開した。

研究成果の概要(英文)：I made "Catalogue on Copies of Yuan Stone-inscriptions." It already opened at Nara-univ.Librally homepage. It is a catalogue of copies or photos which can read on books or website in Japan. Recent trend of Yuan history research, the researcher himself read original stone-inscriptions or rubbings, and it is a mecca for progress of research regardless of the environment of researchers is there. So, the aim of this research is to create an opportunity for Yuan history researchers to freely touch the location information of the stone-inscriptions. Another aim is to aim for unification of notation in Chinese stone-inscription research by deciding the principle of description for each item of this catalog. On this principle, I wrote in 凡例 of this catalogue.

研究分野：中国近世社会文化史

キーワード：石刻 元朝 拓本 拓影 目録学

## 1. 研究開始当初の背景

20世紀末から21世紀にかけて、中国、とくに宋元時代の石刻研究は、清朝時代以降の研究者による文字化(録文)を通じて研究を進展するのではなく、原石、あるいはそれに準じるもの(拓本、拓影、写真など)を利用して自ら「読む」という方向へと展開してきた。時あたかも、中国経済の発展に伴い、中国各地に散在する石刻についての地域単位での資料集の刊行が活発になってきていて、こうしたものに所収された資料を活用しての研究が、我が国でも主流となっている。ただし、どこにどのような書物が所蔵され、どのような石刻史料を見ることが出来るかの相互の情報交換は、ほとんどおこなわれてこなかった。また、その一方で、これらの石刻についての基本的な記述事項、名称、そのまた前提としての石刻内での分類、あるいは年次の判定、について、過去の石刻目録では、それぞれの著者がみずからの見解に基づいておこなうにとどまり、共通した目録規則とでもいうべきものが、未確立であった。

なお、王羲之や顔真卿といった古人の書作品の拓本についての調査研究は少なくないが、そこでは拓本そのものが文化財として扱われ、その視点からの目録作成へと向かいがちであった。

## 2. 研究の目的

本研究では、わが国の資料保存機関にある元朝石刻拓影の目録を作成して、研究者がその環境にかかわらず元朝石刻研究を進展させることが可能な研究条件を作成するとともに、個別項目の記述基準を作ることによって、史料としての利用に有用な形での元朝石刻拓影についての目録記述の原則を形成しようというものである。

## 3. 研究の方法

以下のような方法を用いて、中国近世石刻についてのデータ収集と、石刻目録学のための基礎的検討をおこなった。いずれも対象は国内外にわたる。

(1) 拓影掲載の石刻関係書の収集をおこなうだけではなく、国内の史料保存機関所蔵の中国石刻関係図書の調査と関係部分の複写による収集をおこなう(石刻関係文献の所蔵機関については具体的にはCiNiiを手がかりとすることとした)。

(2) 京都大学人文科学研究所、中国国家図書館のようにWEB上に公開された石刻拓影の調査。

(3) 公開されている拓本実物や、原石の調査。現在国内では東洋文庫や東北大学において、原拓本の閲覧が可能であり、それらの機関の協力を得て、調査をおこなった。さらに、台湾の中央研究院歴史語言研究所では、現在

元朝石刻の拓本のカタログ化が進展中なので、それとの連携を図り、担当の洪金富教授と意見交換の機会を複数持った。また、中華人民共和国では、北京とその周辺を中心に、石刻調査をおこない、拓影と現物との比較をおこなった。

(4) 以上の調査によって得られた石刻拓影を目録化し、逐次研究雑誌に仮目録を掲載する。それに際して、石刻の名称、年代比定、関連石刻との関係などについて、目録記述の原則を決めていく。

(5) 元朝以外の石刻。とくに石刻の形式が多様化した、明代以降の石刻について、調査をおこなうことによって、金石目録学の知識を深め、上記の目録記述の原則に役立てた。とくに、台湾は清朝後半期のものが中心にはなるが、中国全体からみれば「地方」であったため、ローカルな、個別問題にかかわる石刻が少なからず存在して、今後の中国における地方石刻の研究への足掛かりになりそうな気がした。さらに、石刻そのものへのアクセスが比較的容易で、調査、写真撮影に障害が少ないこと、大陸で碑林化、環境整備による石へのアプローチの困難化が進行しているのに比して、寺廟などの現地に石刻が置かれていて(言い換えれば放置されていて)、他の壁記などと併せての、石刻を取り巻く空間的環境が感じ取りやすいことは収穫であった。

(6) 清朝、民国以前の典籍、とくに地方志における石刻関係記事の検討。従来から、石刻資料の来源として、地方志は注目されていたが、近年、行政単位ごとに多く出版されている「新地方志」において、文物関係記事は必須とされているため、石刻関係の記述を調査したが、多くが所在表にとどまること、網羅的に所蔵する機関が国内では見いだせず、調査の趣旨とは合わないことなどから、目録への反映は果たせなかった。

## 4. 研究成果

以上のような作業の結果、石刻自身に年代記述がある元朝石刻拓影、約1600件を収集することができた(今回採用しなかったものの中には更なる検討によって年代比定が可能なものもあるが割愛した)。

これらの石刻拓影について、後述するような原則を建てたうえで、それぞれの原載における記述を再検討して、編年化し、「可見元朝石刻拓影目録」として、作業の進捗に応じて公開してきたが、最終的には、2017年3月現在でいったん調査を終了させ、完了したものを、奈良大学図書館のHPに公開した。(5の主な発表論文等のうち、ホームページ等の項を参照)また、録文だけの掲載など、本資料目録に収めるのに適さないものは、研究のNEWSLETTERである、『13,14世紀東アジア史料通信』に、「近着石刻書所収元代石刻」と名付けた史料速報を掲載した。同誌は、森田

を含む本研究関係者のものを含めた、中国近世石刻（必要に応じ他種の資料を含む）の情報誌として、森田が、編集、刊行をおこなってきたものである。

さて、今回の近世石刻検討の内容を見ていただくために、今回の成果の中心の1つである、「可見元朝石刻拓影目録」の冒頭部分を以下に掲載しよう。ただし紙幅の関係で、縮小したものを、それも、横に倒した形で掲載することにせざるをえず、大変お見苦しいことをお許しいただきたい。

名称	名称根拠	人名	年代	年代根拠	省	県	所載	注記
癸未年太祖聖旨	森田		癸未(太祖)18年10月	文書	山東	青島	嶗山26(享殿)、草原34	
癸未年太祖聖旨	森田		癸未(太祖)18年10月24日	文書	山東	青島	嶗山27(享殿)、草原34	
長春真人詩十首	森田		庚辰(太宗)2年11月	上石	山東	青島	嶗山29(享殿)	
權臣與白道村韓氏道長題			辛卯(太宗)3年10月29日	題詞	山西	霍州	三晉霍州6	
邢州開元寺三聖殿正殿碑	開元	行慶	壬辰(太宗)4年	開元	河北	邢州	開元132	唐李師師等...とあるが、1231への比定は霍州
故太行神廟通仙聖公功德碑并序	首題		癸巳(太宗)9年9月	立碑	北京	房山区	開元132 127(廟)、128(殿)、舊金元	碑陰門人署名
玉皇宮聖旨碑	北區		乙未年(太宗)7	文書	山東	濰坊	北區50・106	癸未年、乙未年聖旨の合類、北區は至正15年に置くが、根拠が不明なので、聖旨の日付に置く
純真玉皇祝文	北區		丙申(太宗)8月5月	文中			北區48・001	現在丙申五月丙辰朝
洞府銘	北區		丙申(太宗)8月10月	文中			北區48・002	丙申記碑
祖空碑	北區		太宗8年(癸未)	北區			北區48・003	
重修龍泉大摩訶寺之碑	首題		丁酉(太宗)9月16日	建	北京	房山区	開元99(廟)、95(殿)、舊金元	上下に記された文字、碑陰首題、龍泉規模遺言之記
秘案碑記	霍州		丁酉(太宗)9月21日	立石	山西	霍州	118(廟)、119(殿)	丁酉年、前年壬午火赤那延聖朝、忍夕高付
秘案聖旨	人文		丁酉(太宗)9月22日	文書	山東	鄒縣	人文2001X、孟府42、43(陰)	下載には「至順2年10月立石」、碑陰は鄒國公家承譜、在孟廟

さて、この目録の各項目についてであるが、名称、名称根拠、人名、年代、年代根拠、所在、所載、などの項目について、原則をたて、WEB目録の冒頭に「凡例」として、掲載している。

ここでそれを、略記すると。  
 名称 石刻の名称については、目録間の際が大きく、同じ石刻が異なった名称で掲載されることも少なくないが、森田は、原石の表示を優先し、首題（本文冒頭に掲げられたタイトル） 題額（多くは石刻上部などに掲げられたタイトル） 掲載文献が付したタイトル 森田の命名 の順で決めていくことを原則としたが、石刻の分類の問題などここには関連するため、まま、原石の用語ではな

く、森田が新たに命名した。  
 重要なことは、命名の根拠を明確にすることで、目録は何に基づいて命名したかを記す「命名根拠」の欄を設けて、明記することとした。

また、石刻上の人名は、封号、字その他多様な呼称が用いられるので、必要な人名を検索可能なように「人名」の項目を設けてフルネームを表示するようにした。

次に問題となるのが、石刻の年代比定である。石刻はその記事の「同時性」にこそ意義があるので、年代の比定はある意味で最も重要な作業であるが、これまでの石刻目録の類では、ややもすれば、石刻中にある年代表記を安易に転記するにとどまっていた。墓誌を例にとれば、死亡時期、埋葬時期、場合によってはさらに石刻作成時期の間に時間が経過していることは珍しくない。石刻目録作成に際しては、比定した年次について根拠を明確にすることが、その石刻の史料的利用に不可欠である。今回は、配列した年次についてそれが何に拠ったか（立石、撰時、埋葬時など）を、各石刻について明示した。

個々の記述の典拠として掲載書を挙げるのは当然のことであるが、多くの書籍が国内で数か所にしか所蔵されていない現状では、研究者のアプローチのためにできるだけ詳細な書誌情報を提供するように努めた。

以上、本研究の成果である、「可見元朝石刻拓影目録」における森田の記述方式の一部を紹介したが、上述のように、「凡例」の部分に、より具体的に書いているので、見ていただきたい。

もちろん、拓影から得られる、年代比定にかかわる情報やその所在情報についても、石刻名称の場合同様に、オリジナルを引用するのがベストではあるが、それには対象石刻があまりにも多いので、原石における記事なるべくオリジナルな形で引用する目録形式を試みる作業を、『三晋石刻大全』を材料として試みて、私案を作成したのが、下記業績のうち、「奈良史学」に掲載したものである。

さらに、石刻の積極的な研究への利用と新着情報の共有のため、旧来からある雑誌『13、14世紀東アジア史料通信』の編集発行を継続担当し、研究期間に、21 - 24号を刊行して、石刻研究と資料の状況を社会に公開した。とくに24号には、これまでの研究成果の総覧として、同誌の総目次と、同誌に連載した「近世石刻書所収元代石刻」の総目とを掲載した。また、石刻に限らない中国目録学にかかわる成果の社会公開として、奈良大学図書館で展示会「四庫全書」そしてその後」を開催した。

なお、今回の補助金に限らず、森田のこれまでの石刻に関する仕事については、『森田憲司教授略歴および著述目録』（私家版、2017年1月）として一覧できるようにするとともに、今回の拓影目録作成の持つ意味とその利

用価値については、雑誌『東方』（東方書店）より紹介記事の執筆依頼があり、現在投稿中である。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7件）

森田 憲司 「近着石刻書所収元代石刻リスト」所収書目 『13、14世紀東アジア史料通信』査読無 24号 8-10p 2017.1

森田 憲司 「『13、14世紀東アジア史料通信』総目次」 『13、14世紀東アジア史料通信』査読無 24号 3-7p 2017.1

森田 憲司 「可見元代石刻拓影目録稿・七続（至正11年以降）」 『奈良大学総合研究所報』査読無 23号 21-24p、2015.3

森田 憲司 「『三晋石刻大全』所載元代石刻目録」 『奈良史学』査読無 32号 121-154p 2015.1

森田 憲司 「近着石刻関係書所収元代石刻リスト13」 『13、14世紀東アジア史料通信』22号 21-24p 2014.10

森田 憲司 「可見元代石刻拓影目録稿・六続（從後元至元至正10年）」 『奈良大学総合研究所報』査読無 22号 13-31p 2014.3

森田 憲司 「近着石刻関係書所収元代石刻リスト12」 『13、14世紀東アジア史料通信』査読無 21号 16-19p 2013.10

〔学会発表〕（計 2件）

森田 憲司 元代拓影目録の作成と中国近世石刻目録学という考え方 九州史学会於九州大学文学部（福岡市東区）2016.12.11

森田 憲司 中国近世の「墓誌」 東洋史研究会大会 於京都大学文学部（京都市左京区）2015.11.3

〔図書〕（計 1件）

森田 憲司 『「四庫全書」そしてその後』奈良大学図書館 20p 2016.6

〔その他〕

ホームページ等

日本可見元朝拓影目録

[http://repo.nara-u.ac.jp/modules/xoonips/listitem.php?index\\_id=4133](http://repo.nara-u.ac.jp/modules/xoonips/listitem.php?index_id=4133)

13、14世紀東アジア史料通信

[http://repo.nara-u.ac.jp/modules/xoonips/listitem.php?index\\_id=4132](http://repo.nara-u.ac.jp/modules/xoonips/listitem.php?index_id=4132)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

森田 憲司 (MORITA Kenji)

奈良大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：20131009